



志度高だより 一飛翔の窓

第114号
(H22.10.29)

「一粒の種」

毎日見ていると、成長というものは見えてこない。

久しぶりに柔道場に足を運んだ。生徒の諸動作を見ていて、随分と遅くなったと思う。動きだけでなく、あいさつを含め受け答えなんかも洗練されてきた。少し時間を置いたせいも、いろいろなことが見える。物事というのはいつもべったりというのではなく、ときとして離れて見ることも大切なんだという一例か。ところが、他人のことはしっかり見えても、自分のこととなると話は別だ。灯台もと暗し、とはよく言ったものだ。「俺はなんでいつもこうドジなんだ。あーあ最低だ」「もういや。いくらやってもダメ。私には才能がないんだわ」こんな言葉をよく耳にする。本人が言うのだから当たっているのだろうが、第三者の目からするとそう嘆くほどでもない。あなたは随分と素晴らしい才能を持っていますよ。そう励ましてあげたい。我慢して少しずつ力をためていけば、小さくてもいつかは花が咲くというもの。

花が出たついでに、私は花が好きで家でも育てている。人は嘘をつく。裏切る。傷つける。でも花はそうではない。心安らぐし、美しいものを素直に美しいと思える。でも手入れは大変だ。手入れを怠ると、たちまちにして萎え、しぼんで、枯れてしまう。逆に、過保護になってもダメ。水をやり過ぎると根腐れを起こす。愛情を持ちながら厳しく、というところか。子育てにそっくりですね。最近の親は両極端で、愛情不足か過保護のどちらかで子供をダメにするケースが多い。何事も中庸が大切。適度な愛情と厳しさ。このさじ加減が難しい。

話を元に戻すが、毎日花の成長を見ていると、なかなか大きくならない。早く咲け、という気持ちばかり焦って、期待は裏切られる。花の方にしてみれば、これでも毎日数ミリずつ伸びているんだ、長い目で見ろよ、となる。人間はせっかち。花と違って結果を早く手に入れたいがために、「早く、早く」とせかす。そんなに簡単に手に入る結果なんて、どう考えたってたいしたものじゃない。

「雌伏」という言葉がある。苦節何年というやつだ。出典は『後漢書一趙典伝』。雌鳥が雄鳥に服従することから、とある。転じて、いつか日の目を見ることを期す、となる。例えばチュウリップにクロッカス。厳しい冬、地中でじっと力をため、そして春の到来とともにパッと花開く。

よく考えると、私たちの周囲、つまり自然界はこのようなことばかりではないか。今年の猛暑を謳歌した蝉。彼らも地中で数年間幼虫として過ごし、梅雨が明けると同時に地面を破り木へ。(最近ではアスファルトで出てこれない蝉もいるらしい)そして命を削って鳴き、子孫を残す。人間もこの待つ期間、耐える期間というのが大切なんだと思う。待つことで、耐えることで、人が作られる。革だって何度もなめすことで、なめらかで強くなる。

植物は種の保存力が極めて強い。花が少し減ってきたかな、と思ったら、切り込みを入れる。すると、植物は種子になる前に花を切られるため、これはまずい、早く花を咲かせないと、となりどンドン花を咲かせる。花には悪いが一種の騙しだ。植物は結実するまでにももの凄いエネルギーを費やす。そのときの生命力や、核爆発に匹敵するものがある。今年は秋だということにまだ温かい。夏に種を落とした日々草が発芽して、今花を付けている。背丈は低いけど花は一人前。おおー、と感嘆するしかない。そしてまたまた驚いた。校内のプランターに植えたコスモスだ。最初、日陰にあったため虚弱体質で、細く白くカイワレ大根そっくりだった。これはダメだと思いプランターに移植したのだが、やっぱり背丈はどれも伸びない。まるでコスモスの盆栽。ところが、この爪楊枝ほどの盆栽コスモスが、なんと5ミリくらいの花を咲かせているではないか。もう自分はこれ以上大きくならない。そう思ったのだろう。そして思い立って花を咲かせた。実に小さい花だ。でも、私を感動させたでっかい花だ。いやーやるもんだ。本当に感動してしまった。だから花が大好きだ。

人間の中にも種がある。一粒？ 二粒？ 数は人によって異なるだろうが、必ず一つはある。その種をどう育て、花を咲かせるか。雌伏のときを経て、見事に花を咲かせば、人生って捨てたもんじゃない、と少しは自分を見直すかもしれない。成長は見えにくいけど、その日を気長に待とう。

